

芥川賞全集

第五卷



文藝春秋

芥川賞全集 第十卷

著者

三木 卓

森 敦

野呂 邦暢

阪田 寛夫

日野 啓三

林 京子

中上 健次

岡松 和夫

昭和五十七年十一月二十五日 第一刷

定価 一八〇〇円

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五—一二二一

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

目次

喪神	五味康祐	5
或る「小倉日記」伝	松本清張	19
悪い仲間	安岡章太郎	47
陰気な愉しみ	吉行淳之介	79
驟雨	小島信夫	99
アメリカン・スクール	庄野潤三	131
プールサイド小景	遠藤周作	151
白い人	石原慎太郎	199
太陽の季節		

年譜	受賞者のことば	選評	飼育	裸の王様	硫黄島	海人舟

			大江健三郎	開高健	菊村到	近藤啓太郎
531	521	389	349	295	267	239

芥川賞全集

第五卷

題 裝

字 丁

中 粟

田 屋

功 充

喪

神

五
味
康
祐

(第二十八回 昭和二十七年下半期)

「五味康祐代表作集 第一巻 喪神・柳生
連也斎」(昭和五十六年二月発行、新潮社刊)
を底本とした。

瀬名波幻雲齋信伴が多武峯山^{たふたみね}中に隠棲したのは、文祿三年甲午の歳八月である。この時、幻雲齋は五十一歳。――翌る乙未の歳七月、関白秀次が高野山にて出家、自殺した。すると、これに幻雲齋の隠棲を結びつける兎角^{うかく}の噂が、諸国の武芸者の間に起った。秀次は、曾て、幻雲齋に就き剣を修めたからである。

一体、幻雲齋の業は妖剣だと謂われている。関白ともあらう身が、一妖術者に師事した理由は分明でないが、その機縁に就ては、次の様な挿話があった。――天正丙戌の歳暮、京の日吉神社に於て武芸奉納の行われたことがある。そのとき、諸大名の差出す手練者の間で半ばは儀式的な技の競われた後、特に、一般浪人中からも腕に覚えある者の出場が許された。当時は、戦国のならいで、主家滅亡のた

め流浪する劍豪が多かったからである。幻雲齋もその浪人組にいたのである。

当日の奉納試合は、秀吉が、恰度この極月に太政大臣に任じ、豊臣の姓を賜ったその祝意から、幼名に因んだ場所をえらんだといわれている。が、内実は、在野の劍客を召抱える機を得たい、という家康の乞いを容れた為であった。元来秀吉という人は、奥山休賀齋に剣を修めた家康ほどの発明と違つて、斯道にはからきし、腕も素養もない。寧ろそういうした修業を輕視し、「戦場に於て斬り覺えに覚えぬれば劍術など無用なり」といった類の人である。併し、斯道に心入れ深い家康に対しては、この年正月和を睦し、五月には妹を嫁がせたりした位で、何かと機嫌をとる必要があった。家康にすれば、こうした機会に豊家の武人の技術を探らうとする内意があったからであらうが、秀吉もそれと承知で、敢てこの挙に出たものである。

さて幻雲齋は、係り役人へは「大和国井戸野の住人、夢想劍、瀬名波信伴」と名乗り出、この日立合つた鹿島神流比村源左衛門景好、天流稻葉四郎利之を、夫々一太刀で殲したが、その勝ふりが異様であつたので、次に書く。――

当日、正面の座には秀吉、秀次、と並んで家康はじめ、歳暮拝賀の諸大名が連坐し、審判に當つたのは正田文五郎

景忠——後の栖雲齋であった。この正田景忠は、上泉伊勢守（後年上洛して日本で最初に剣術を天覧に供した時、改めて武蔵守に任官された、『新陰の流』の流祖である）の弟子で、当時は秀次の師であり、秀次自死後は京都東福寺に行い澄ました人であるが、曾て、柳生宗厳——当時中条流の達人——と試合したとき、立合いざまに、「その構えは悪しゅうござる」と、ほんと打込んだ。宗厳が口惜しがつて「今一度」と向うと、「それも悪しゅうござる」と、三度まで打負かした上手である。この奉納試合後の一日、秀次に召され、幻雲齋と試合せよ、と命じられた時はどうしても応じなかった。及ばぬと知って逃げたかと人が嗤うと、景忠は、「瀬名波は狂剣だ。試合えば必ずこちらが傷つく。左様の相手を致さぬが寔の心得というものである」と言ったという。

正田景忠程の達人にして、未然に、幻雲齋の術の怖ろしさが見破り得たのである。比村、稲葉兩人には適わなかった。比村は、幻雲齋に対する前、東軍流の使い手田中某を二合あまりで打破り、意気大いに軒ついていた。流浪は戦国のならい、野望抱懷の貌とは云え、己が武術の誉を挙げ諸大名へ仕官の目見得にしたいとは、浪人組共通の念いでもあったのである。控えの場から歩み来る新たな相手の足運

びを計り乍ら、比村源左衛門は、早や幻雲齋の技倆を見抜いたと、思った。

幻雲齋は所定の袋竹刀を係り役人から受取ると、景忠に一礼して、無造作に比村と対する。互いに抜合つてから、比村は改めて驚いた。構えというものを知らぬ太刀筋である。この日の試合は、上泉信綱の発案した袋竹刀を使用して居たが、（竹刀といっても現今のものでない。竹を細く割り、三十本から六十本位を袋に入れ、鏢はつけぬもの。長さ三尺三寸である。普通、試合で想像される木剣の場合、単に小手へつめるか、相手の木剣を叩き落すのみで、けつして面、咽、胴等へは打込まなかったものである。が、袋竹刀であれば惜しまず撃つことが出来た）それでも、この隙だらけの相手へは、したたかに打込むさえ味気なく、寧ろ木太刀同様、間一髪にびたりと詰め、はやよく詰まりたるよと手並をこそ褒められたい程である。比村はそこで呼吸をはかり、鹿島神流手練の逆風太刀、退くと見せて鬨にさつと打ちを入れた。ところが、真際で詰める筈の竹刀が、幻雲齋の肩に当り、同時に息のとまる程自身も脾腹を搏たれていたのである。

「それ迄」景忠は幻雲齋の勝を宣した。

源左衛門は心外でならぬ。相揃ちというなら分る。自分

の敗けとは、氣持の上で承服し難い。「今一度——」と申し出た。

景忠は無用と言った。すると比村は、二十五歳の若さにまかせてこういう事を言った。「成程自分が勝ったとは言わぬが、併し、けつして負けておらぬ。武士の面目にかけこの場に及んでこれを申す上は、改めて真劍勝負を所望する。このこと上へ取計らうてほしい。今日の日を血で汚してならぬなら、瀬名波殿から、他日の口約を得て貰い度いものである」

景忠は重ねて「無用」と言ったが、この小紛が秀吉の目にとまった。秀吉は仔細を聞き、「見苦しい、双方引退れ」と言おうとした。が家隸でない比村へはこれは云えぬことで、亦、無理を承知で申し出た以上、この儘では済まぬ覺悟が比村にあることも瞭然である。此処は申し条を有すのが武士の意氣地で御座ろう——そんな風に進言する大名もあつた。それで、秀吉は苦々しげに「よきに謀らえ」と秀次を通じて言つた。

上の声が掛かればそれ迄である。景忠は、幻雲齋に了知するかと訊いた。このとき迄、無感動に控えていた幻雲齋は唯、點頭する。場所だけは、今日を憚り竹矢来の外ということになつた。

兩人は銘々の太刀を佩き、再び相對した。今度は間合約三間である。比村は昂ぶりに紅潮している。(おのれ今度は)という氣概がある。幻雲齋の方は、眉一つ動かさない。蒼ざめて、太刀の残心を下段にとり、まるで、相手を覗かうともせぬのである。平靜というよりは、何か他事に想い耽る憑かれた風があり、それが一層見る者の心を奪つた。

比村源左衛門は星眼に構え、じり、じりと爪寄つた。比村には、相手の身構えに心魂の入つてないこと、先刻同様なのが分るが、真劍だけに容易には踏込めない。白刃を距てて暫し、容子を窺つた。すると、突如である。木偶の棒へ斬り掛けるに似た安易のこころを誘われ、比村は瞬間、背後に冷氣を浴びた。恐らく彼が幻雲齋の劍を見破つたのは、この一瞬であつたろうと思われる。——が、内心の誘惑に乗つてはならぬ、と自ら戒める間もあらず、『習慣』から仰ぎざまに斬りつけていた。比村は、弧を描いた幻雲齋の太刀一薙ぎに肩を割られ、血を噴いて倒れた。

矢来内は騒然となつた。多少はその道に心得ある者ばかりである。僅かに指爪で地を搔き、その儘息絶えた比村の屍を足下にして、猶もこころ其処にあらざらず、茫然立ちつくす幻雲齋の異様は、凡そただ事とも見えなかつた。幻雲齋は当時四十三歳、劍の誉と青雲の野望を賭けて試合するに

は些か^{いそ}齡が過している。客気にはやる浪人組の中にあつて、寧ろ老成の思慮深い立場である。それが、子息に等しい年配の相手を斃し^{ころ}さず、虚ろに、風の鳴る松の梢を見上げてゐる。——幻雲斎の容貌は元々美容でない。顎骨が張り、額は瘤の如く、唇厚くて眉うすい猫背の小身である。ささくれた小髻の後れ毛が風でその蒼い頬に乱れかかるが、折は木枯の砂塵を捲くこの日の寒さに、それでも冷汗は掻いていたのか、べっとり、髪が顚顚にまとい附いていた。白刃だけは、比村を斃した一瞬にはもう、血も拭わず鞘に収めている。

神殿の廊から声があり、係り役人が改めて檢視に來た。左袈裟一太刀に、深さ四寸余りを切られ比村は既にことごとく死んでいる。屍体は尊を覆われ、直ぐ別処に運び去られた。誰か、比村と近附きの者が居るなら名乗り出られよ、と景忠は浪人組に向つて言う。控えの場は再び騒然となったが誰人も名乗り出る者はなかった。

処が、前に奉納の木太刀の型を見せた劍士の中から、些かのゆかりがあると名乗り出た者があつた。根来の藩士で、稲葉四郎利之という者である。四郎利之は、当時天流を使つて技儕輩を抜きんで、知行二百俵十人扶持で馬廻り役を勤めていたが、係り役人の前へ進み出ると、こう言つた。

——自分は以前、三木城主別所長治に仕えていた、城陥落ののちは諸国を流浪し、その折、宇喜多家の家臣であつた比村殿には些かの知遇を得ている。昨今、立場を替へ比村殿の不遇を見てきたが、実は今日の試合に出場を懇めたのは、自分である。勝敗は余儀なき事。とはいへこの期に及んでは、友誼の手前も黙し難い。藩主が居られれば直ちに赦しを乞う処であるが、その叶わぬ今は、せめて、後日のため関白殿に御意得たいと思う。何卒、この場に於て、真劍試合の許可を願つてほしい。

稲葉四郎の面には真情が溢れている。技も比村よりは数段優つてゐる様に見える。係り役人は階の前へ進み行つて、この由を上申した。秀吉は、「ならぬ」と言つた。どうしても友誼が立たぬなら、その者、別の日と場所を選ぶべきである、そんな意味のことを云つた。すると、そこへ、景忠が進みよつた。景忠は秀次に向い、「稲葉なる者の申し状は武人の義に於て当然と存ずる。何卒、御許容を与えられたい」と進言した。それが宜しかろうと言ひ添える大名もある。こうなつては、意地にも宥すとは秀吉は言ひ出さない。同意を乞う秀次の視線を外らして、「ならぬぞ」と言ひ放つた。

「されば」景忠が引返そうとしたとき、

「待て」制したのは家康である。家康は秀吉に對^{むか}つて、「瀬名波なる者の手並、奇怪と存ずる。武術を嗜むこの家康、眼利のためにも今一度見届けたい。何卒」と懇望した。秀次もここぞと言葉を添えた。

とうとう、不快げに、秀吉は、頷いた。

景忠は引返して己れの牀几へ戻る。今度は、矢来内での試合である。幻雲齋は係り役人の口上を、乾いた瞳で聞いていたが、ふっと鼻で嗤^{わら}ったという。稲葉四郎は、襷掛けに鉢巻を緊め、神殿を背に身構えると矢来外の幻雲齋を、既に抜刀して待った。矢来口の足輕が幻雲齋の入ると同時にさっと左右に開く。幻雲齋はその儘近寄った。些かも四郎を介意した様がない。緩^{ゆる}り、併し同じ歩速でずんずん寄った。場内は呼吸を嚙^くむ。

「——覺悟」四郎は裂帛の気合もろとも、大上段に斬りつけた。相討ちを狙っていたのである。併し、身も躲^{かわ}さぬ幻雲齋の抜打ちに右手首を斬り落され、返す刃で、背を割られた。

其の場から幻雲齋の姿は消えている。旬日後、秀次の意を含んだ者が尋ねあてた時、幻雲齋は寺町通りの旅籠屋にいたという。

翌日、召される儘に幻雲齋は淀城へ伺候したが、その時、秀次から「天晴^{あつぱ}な手並である。いずれで修業したか」と訊かれ、こういう事を言っている。

自分は、実は過日兩三度の試合をしたとは憶えているが、相手を打負かしたことは、記憶にない。何時もそうであるが、何うして宿へ帰ったかも覚えぬ。夜半、目覚める懷いで我にかえり、思はず刃を檢べると、新しい血脂^{ちのり}が附^おいていた。それ故、辛うじて人を殺めたと思ひ当る程度である。修業に就いては多少の語り草もあるが、上へ申し上げる程のこともない。嘗^な、我知らず夢想の劍を使うゆえに、かく一派を唱えている——

そう話す幻雲齋の眼は真直ぐ秀次に注がれ、表情にいささか暗鬱の色はあつたが、虚偽を申し述べているとは見えない。むしろ、年配の、態度に劍客らしい落着きがあつたので、過日試合を目撃した側役の士^{さむらい}たちは一層奇異の感にうたれた。秀次も、「その方ほどの者が何故おとな気なく浪人組に加わったのか」と重ねて問うと、これには、「些か存念がござれば」と応えたので、それ以上の追求には言を左右し、苦笑するばかりだった。

秀次が幻雲齋に師事したのはこの時以来である。秀次は絶えず側近く召そうとしたが、幻雲齋は隔月に一度伺候し

ては、七菜二の膳附の饗食を享け、菓子一折等賜つて引退るだけで、秀次が関白に補せられてもそれ以上には近附かなかった。一つには、何となく幻雲齋を毛嫌いした秀吉への配慮があつた為とも思われる。——それでも、秀次が彼の妖氣に可成の感化を蒙つたことは確かである。「近ごろ気色すぐれ給わず、心空に、奥女中の眉など見惚れ給うては、今ぞ、疾く余を撃て、等小姓に仰せらる。怪しきことに候」と、征韓軍が釜山に還つた頃の日附で、机廻り役を勤めた側近の一人が書き遺している。秀次自殺の二年前である。

幻雲齋が多武峯に隠棲して六年後の或る春さき、飛鳥路から細川に沿ひ、茂古ノ森を左に見て、多武峯への裏山道を登つてゆく若者があつた。若者は、この山道唯一の峻所——竜臥峠を登りつめると、とある傍の樹影を認めてほと腰を下した。道は、更に其処から勾配を加え、樹間に、時折は岩を噛んで羊腸と連つている。

恰度、葉洩れの陽の耀きは午の上刻の頃おいである。若者は仰いた空から頭をめぐらし、眼下の眺望を俯瞰したりしていたが、蹶て、思い当つた風に肩に捲いた包みの午餉を取り出した。路傍の岩間に、僅かであるが湧水の零れるの

を見出したからである。彼の頬には、未だ少年の日の紅が残っているが、真率の意志に引緊まつた唇で、大きく、餉をひと口した。

若者は、これから幻雲齋に決戦を挑みにゆくのである。彼は当年十七歳、姓を松前哲郎太重春といい、今を去る十四年前、京に於て相果てた稲葉四郎利之が一子である。四郎利之は、『武門に恥辱を加えた心得ちがいの廉』を以て知行を召上げられ、哲郎太は乳離れせぬ身を、伯父の、播磨国佐用郡の郷士松前治郎左衛門方に預けられた。其処で、母の旧姓でもある松前の姓を冒したのである。哲郎太の母は、ぬいといい、元別所長治の奥に仕えた女中である。生来惻発で、夫流浪ののちは、胎の哲郎太と実家に戻り、日夜旧主別所家の墓に香華を絶やさなかつた。夫の四郎利之が馬廻り役に召抱えられたという報せに、喜び勇んで根来へ赴き、半年後のあの悲遇である。ぬいは、伯父へ哲郎太を依頼する書に黒髪を添え、身は紀三井寺の尼室の人となつたが、「亡き父上の御無念如何ばかりかと存じ候」云々の文を、哲郎太へ最後の言葉として遺した。

哲郎太は治郎左衛門方で志潔く成人したが、長ずるにつれ、富田流小太刀の奥義を修めた。片時も亡父非業のことが念頭を去らない。一日、今は怙である治郎左衛門と新

妻まゆらを前にして決意の程を打明けたのである。治郎左衛門は音に聞く幻雲斎の手並を按じ、今暫しと滞めたが、翻意なきことを知ると、家伝の秘刀を賤けした。まゆらは席半ば、膝を隣りて退座している。同年のこの妻には、夫の氣勢を挫かぬよう心掛けるのが精一杯の愛情だったのである。――

哲郎太は餉を食いとると、我にかえり、野袴の塵を払つて岩間の泉に咽喉を潤おそうと歩み寄った――その時、何処ともなく、鳥の囀りに似て玲瓏たる歌声が聞えてきた。竜臥峠と呼びならす土民さえ、仙人以外は滅多に通わぬと聞いたこの峠道である。哲郎太は怪しんで耳を敬てた。唄声は、山の森気に木魂して次第に近寄つて来る。今は、疑いもなく女人が山を降りてくるのである。彼は覚えず岩蔭に身を倚せた。

程なく、勾配の彼方にそれらしい姿が見え隠れした。矢張り女である。長い黒髪を背に靡かせ、若く、透きとおる声で唄いながら、風に乗った女鹿の捷さで駆け降りてくる。哲郎太はいよいよ訝しくなった。耳をすますと、女は、こんな風に歌っていた。

前張に 衣は染めん 雨ふれど
雨ふれどうつろいがたし

ふかく染めては

見る間に女は哲郎太から程へだてぬ所まで駆け降りて来た。女の方でも彼を見止め、はっと声をのむと、身を躍らせると同時に、彼から二間余の間合を措いて、ぴたりと停止していた。突き衝るかと思えて哲郎太の方へふわりと飛んだのは、女の指を離れた躑躅一輪のみである。それだけが走り来た加速度で彼の足下に落ちていた。

哲郎太は茫然と女を見守った。

女も眉若い青年武士の旅姿を瞞めた。

――女は、荒絹の著物を二重あまりに太縄で結えている。眉のあたりはさすがにせわしい息づかいを見せているが、何故か、足下に落ちた花が、女の切先に似て何うしても哲郎太には一步を踏出すことも出来ぬ。暫し、双方ただ見詰めあっていた。

やがて、

「御身は土地のお人か？」と哲郎太が訊いた。

女は、頷いた。

「では、夢想庵と申すいおりを御承知であろうか」

「存じております」女は予期した問いという面持で哲郎太の扮身を見直している。

まだ可成の道程であろうかと、彼が重ねて問うと、うな

ずき、夢想庵は、木叢の中ゆえ見分け難いだろうと言った。その落着いた応え様が、ふと彼を訝らせた。尋すと、果して幻雲斎の娘であった。

それから四年。

哲郎太は、今では悉皆夢想庵の一員になっている。

あのとき、女を幻雲斎の娘と聞いて、はや敗れたり、と悟った。娘に対してすら己が技が慥おうとは思えなかったからである。それでも、改めて姓を名乗ると、理由を告げ、娘を案内に立てて山を登った。そして、山頂の空地で試合をした。

何故、幻雲斎が哲郎太を助けたのか、当の哲郎太は無論だが、娘のゆきにも分らない。それ以前にも、哲郎太の如く敵討を願うのでなく、武者修業と称する者で幻雲斎にとど目を刺された者は、五指に余った、とゆきは洩らすのである。それが、哲郎太の場合は、右の耳朶を掠め取られただけで、寧ろ、手当の薬草を直ぐゆきに採りに走らせたのであった。

哲郎太はその場に自刃しようとしたが、幻雲斎はそれを制してこういうことを言った。「お前は、未熟の故に敗れた。何故更に修業をつんで立向おうとせぬか。お前に今施

すことを恩にきる必要はない。此処に棲んで、何時なりと隙あらば挑むがよい。わしも、その折再びお前を赦すとは限らぬ。亦、わしの方から斬りつけるやもしれぬ。——が、今日は、その方の負けじゃ。負けなれば潔くわしのこの命をきけ」

哲郎太は「推参なり」と叫んだが、素早く利腕を抑えられていた。そして、幻雲斎は更に「わからぬか」と、ひと言、小声で言ったのである。

何を分れというのか、暗示めくその語意を究める前に、彼は、敗れたという事実の前で潔くなければならぬと恥じた。元より今となって生命は惜しまない。遁れ帰れる道理もない。とすれば、一切を敵に委ねるこそ武士の本懐であろう。彼は、根に土の香のする薬草を抜き帰ったゆきの施療にいつか身を委せていたのである。

爾後、庵で、寝食を偕にする生活がはじまっている。歳月は、慈悲を生む。いつしか、ゆきを交え、ふと親子三人の団欒に似たたまゆらを我にもあらず過す様になってきた。尤も、父の仇とはいえ、実感に、哲郎太は父なる四郎利之の面影を知らぬ。武士の意気地というも所詮は人間あつてのことである。人里絶えたこの深山に暮す身には、人間同士というばかりで、早や限らない親しみが湧くの否みえ